対談

千住　博　日本画家（京都造形芸術大学学長）
森井士朗　㈱たづアート取締役会長

京都から発信。過去・現在・未来の芸術。

京都造形芸術大学学長の千住博氏は
日本画家でありながらニューヨークに在住し、
世界を舞台に活躍する芸術家。日本画の域を超越したその作品は
観る人の意表を突き、感動を与え、やがて何かを問いかけてくるようです。
そんな同氏の芸術と京都とのかかわりや、芸術の可能性について、
画廊・たづアートの森井士朗会長と語りあいました。

滝にこめた想い －縄文のパッションと弥生の美－

森井◎お忙しい千住先生にご無理を申し上げましたのは、先生にとっての美術とは、あるいは京都の文化、芸術の魅力についてお伺いしたいと思ったのです。先生とのご縁はかれこれ20年になりますね。その頃は茅ヶ崎のアトリエで創作をなさっていて、そこへ伺ったことも懐かしく思い出されます。ほどなくニューヨークへ行かれて「フラット・ウォーター」が話題を呼び、一躍世界の舞台に踊り出られました。

もりい・しろう＝1941（昭和16）年生まれ。同志社大学文学部。70（昭和45）年㈱たづアート設立、78（昭和53）年画廊たづ開廊。93（平成5）年京都画商相互会会長（98年第2期）。

千住◎あれは、ハワイ島のキラウエア火山の裾野に広がる荒涼とした溶岩と曇り空だけを描いたもので、私にとってあの風景は原始時代の自然なのです。地球そのものの風景というか・・・。ハワイというとワイキキの浜辺とかフラダンスをイメージする人が多いけれど、神話的な荘厳な自然が残っているんです。

森井◎その後、現代美術の頂点ともいうべきベネチア・ビエンナーレに東洋人として初めて優秀賞を受賞されました。あの時の滝の作品「ザ・フォール」に私も衝撃を受けた一人です。滝を描かれる意味は何なのでしょうか。

千住◎水の惑星たる地球という「フラット・ウオーター」のメッセージから少し進化して水と重力に着目したのです。水と重力は地球上のあらゆる生命の母であると・・・。つまり、それは滝だ、と。紙の上から絵の具を垂らすといったアクティブな手法を取り入れて巨大な水の固まりが重力によって下へ落ちてくる迫力を表現したかった。しかし、あの絵は僕が描いたというより芸術の女神が描かせてくれたといった方がいい。森羅万象のありのままの姿に、僕は従っただけなのです。

森井◎日本画の手法としては異例ですね。縄文的なエネルギーと音楽すら感じます。

千住◎そうなんです。芸術って本来、五感で感じるコミュニケーション手段ですから、縄文的なパッションを伴わない作品は観る人の五感には響かないと思っています。「見えないものを見えるようにする」。それが芸術本来の役割で、表面を美しく仕上げることが目的ではない。縄文的なパッションでありのままの自然の美を受け止め、それを弥生的な美意識と技術で表現するっていうのでしょうか。

時代が京都について来た

森井◎現代アートとしての日本画の世界を独自の手法とパッションで切り拓（ひら）かれた千住先生ですが、京都の美術文化、特に絵画、日本画をどう感じておられますか？

千住◎京都って、古い町なんだけれども芸術でも学問でもその他のサブカルチャーでも何だかいつも時代の先端をゆくようなアバンギャルドな文化が生まれてきますね。不思議にも・・・。京都画壇もしかりで、琳派という独特の表現方法を確立した尾形光琳なんてその典型ではないでしょうか。伊藤若冲もそうですね。現代の日本人だけでなく、世界の人々も感動します。その一方で、円山応挙だとか竹内栖鳳といった上品な作風の画家も輩出する。あらゆる美が切磋琢磨（せっさたくま）し合っている町って感じがしますね。そこが京都の魅力です。

森井◎千住先生は、現代の尾形光琳だという人もいますよ（笑）。あらゆる文化はそのまま保存されるのではなく、少しずつ形を変えながら進化もし、発展もしてゆくものだと思いますが、先生のおっしゃるようにそれは、あらゆる美の切磋琢磨のなせるワザかもしれませんね。京都はそういうふうに切磋琢磨しながらつながってきた町。だからこそ千年以上も都市として生き延びてきたのだと思います。その古刹（こさつ）の一つ、大徳寺の障壁画を手掛けておられるそうですが、これは京都、そして世界への大きな問いかけになりそうですね。

千住◎予言をするみたいでちょっと不遜ですが、次の文化は京都から世界に発信されてゆくと思っています。理由は、美術でも建築でも学問でも京都には文化の本質があると思っているからです。それは過去が蓄積してきたもので、町に転がっている小石一つとっても、遠大な歴史の蓄積がある。京都で学ぶ若者たちが幸運なのはそんな気づきの装置が町に溢れていること。さらには、豊かな自然の移ろいもあります。それを「何て凄（すご）いことなんだろう」と気づくことが芸術の発想の根本だといっても過言ではないので、そんな環境で暮らす京都の若者から常に新しい発想と次なる文化が発信され、未来へとつながって来たのです。多彩な文化が混沌（こんとん）と同居する京都という町には物事の本質がある。本質を問いかける芸術家にとっては格好の場所なんです。私自身、京都に住みたいと思っているくらいです。京都こそが世界の文化の拠点としてありえる町だと・・・。やっと時代が京都について来た、そんな感じがしますね。

森井◎ニューヨークではなく、京都ですか？

千住◎当面はニューヨークを拠点にするとしても、いずれは、なんて思っていますけどね。それに、そもそもは母方は、京都にとてもかかわりのあった家系なんです。

森井◎世界の千住先生からそうおっしゃっていただくと、新時代の日本画復興の新しい気運が京都から盛り上がりそうですね。期待しています。

今こそ、芸術でコミュニケーションを

森井◎ところで、この度の東日本大震災では京都造形芸術大学の学生にも影響が及んだと思いますが、こんな時、美術の役割とは何か？　我々（われわれ）美術業界での携わる役割とは、また、なすべきことは何だろうかと考えるのです。

千住 博「ウォーターフォール」

千住◎こんな時こそ芸術の力、人と人のコミュニケーションを深めていく芸術家の成すべきことはいっぱいあります。芸術は物事の本質、原点を示すことで、人と人が連帯しあう知恵です。その意味でも僕はさらに使命感を強くしました。人々の何かになりたいと。つまり、被災された人たちに「あなた方は決して孤立していませんよ。僕たちがあなたのそばに寄り添っていますよ」というメッセージを送ること。そうしたコミュニケーションこそ芸術家の使命であり、人としての当然の心だと思っています。こんな時に、絵や音楽が被災地の人々の役に立つのか、と思う方もいるかもしれませんが、しかしそれを望んでいる方は多いのです。だから、被災地で音楽会も展覧会もやろうではありませんか。

森井◎被災された学生も多いのでしょうね。そういう学生に授業料を全面的に免除されたり、救援の組織を立ち上げられると伺いましたが、そのご英断は他の学校のさきがけとなりましたね。

せんじゅ・ひろし＝1958（昭和33）年生まれ。東京芸術大学日本画専攻卒業。95（平成7）年ベネチア・ビエンナーレ絵画優秀賞を東洋人で初受賞。京都造形芸術大学教授、副学長をへて2007（平成19）年から学長。『美術の核心』『ルノワールは無邪気に微笑む』など著書多数。

千住◎間もなく、学生たちの展覧会を開催する予定ですが、その収益の一部を被災地に送ることも決定しました。とても長い時間がかかるかもしれませんが、諦めないで前に進んでいくことが今、一番大事なことではないでしょうか。よく「成功の秘訣（ひけつ）は何ですか？」と質問されますが、僕は「成功するまでやるんです」と答えています。つまり、諦めたり、投げやりにならずに前に向かって一歩ずつでも歩くこと。こんな時代だからこそ、それしかないと思っています。

森井◎自然の前に、人類が築き上げた文明の脆（もろ）さを痛いほどに感じた今回の災害で、私たちはもう一度、本質を見つめることの意味を感じたのではないかと思っています。それは、自然への畏怖（いふ）であり、その自然に寄り添って生きる生物の知恵であり、コミュニケーションという精神の通い合いのなかでこそ育まれる文化の大切さ。芸術はコミュニケーションだと主張される千住先生のメッセージが今こそ、人々の心に染み渡るのではないでしょうか。
本日はありがとうございました。

企画・制作＝京都新聞COM

東日本大震災により被害を受けられました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

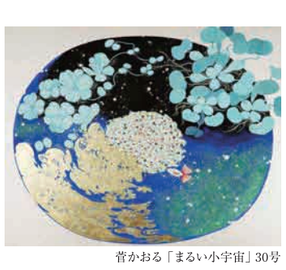
千住博「滝桜」

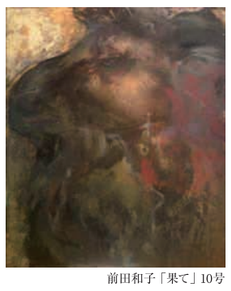
今川教子「余韻」72.0×91.5cm

中村貴弥「Infinite light 希望」4号円窓

田中裕子「うつろい」10号

フクシマサトミ「紅い花」23.5×130cm


菅かおる「まるい小宇宙」30号


前田和子「果て」10号

石井鈴「ひととき」20×60cm

外山寛子「一本の樹」10号

株式会社 たづアート
画廊 たづ
TazuArt Co.,Ltd.
〒605-0037 京都市東山区三条通神宮道西入西町138-1 たづアートプラザ1F
【営業時間】AM10:00～PM6:00 日・祝日定休
【TEL】075-771-8225 【FAX】075-771-1004 【HP】http://tazuart.com/

京都造形芸術大学　日本画専攻
千住博研究会作品発表展
2011.6.1 wed — 6.14 tue
大丸京都店6階美術画廊 アートサロン ESPACE KYOTO
電話(075)211-8111／10時→20時 www.daimaru.co.jp